

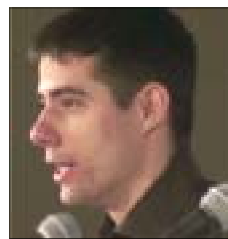
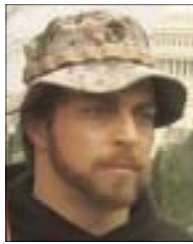
3.22イラク戦争開戦6周年 映画&講演会

# 冬の兵士が語る 「対テロ戦争」の真実

映画：「冬の兵士 - 良心の告発」

講演：田保寿一さん

(ジャーナリスト、「冬の兵士 - 良心の告発」制作者)



3月22日(日)1:15~4:30

浪速人権文化センター

主催：リブ・イン・ピース 9+25

### 3.22イラク戦争開戦6周年 映画&講演会

## 冬の兵士が語る「対テロ戦争」の真実

ブッシュ政権が、フセイン元大統領による大量破壊兵器の保有を理由にイラクに侵略戦争を開始してから6年が経ちました。大量破壊兵器も「アルカイダとの関係」も全くのどっち上げであることが明らかになりながら戦争と占領は継続され、ブッシュ政権を引き継いだオバマ大統領も「テロとの闘い」を継続しています。イラクからの撤退表明は、18ヶ月以内に戦闘部隊を引き揚げるという全く欺瞞的なもので、5万人の支援部隊、永久軍事基地建設、15万人の民間軍事要員については言及を避けています。アフガニスタンを「主戦場」として17000人の増派を表明しています。このようなオバマ政権の対応は、米国市民の感情とは相いれないものであり、「チェンジ」に対する幻想は急速にしぼんでいます。米国の反戦イラク帰還兵の会は、戦争と占領に反対し即時無条件全面撤退を要求しています。一日撤退が遅れるごとに、イラクの人々も米兵も死に続けるとして強い懸念を表明しています。

日本政府は、いまだに「大量破壊兵器保有」の過ちを公式に認めていません。そしてアフガン戦争とイラク戦争への加担を契機として自衛隊の海外派兵をエスカレートし、今度はソマリア沖「海賊」対策を口実として海外派兵の恒常化を狙っています。それは任務遂行のための武器使用を認めるなど、「専守防衛」の従来政府解釈や憲法9条の交戦権の放棄を踏みにじるものであり、決して許されないものです。

イラク戦争開戦6周年に抗議し、全世界で戦争と占領に反対する行動が行われています。今年は、イスラエルによるパレスチナ侵略に反対し、ガザの封鎖の解除と占領の終結を求める闘いが、イラク・アフガン戦争反対と結びつき、大きな広がりを見せています。

私たちは、「冬の兵士 - 良心の告発」という、現在行われているイラク戦争を遂行する側からの勇気ある証言の記録を真剣に受け止め、日本政府の戦争加担の責任、自衛隊派兵の責任、また旧日本軍が行った侵略戦争の賠償責任の問題を改めて強く問いたいと思います。

2009年3月22日

リブ・イン・ピース 9 + 25

**田保寿一プロフィール**：1950年富山県生まれ。91年、番組「ザ・スクープ」のスタッフとして湾岸戦争終結直後のクウェート取材。米軍が主張したイラク軍が原油を流し水鳥に被害が出たという事件について、実際は米軍の空爆でクウェートの石油精製施設が破壊され、原油が流出したものであることを明らかにした。

2003年10月からイラクで取材。ファルージャなどのスンニ三角地帯を日本のメディアとして初めて取材。ムクタダ・サドル師取材インタビューに成功。同年12月に再びイラクを訪れ高遠菜穂子さんの協力のもとストリートチルドレン、サマワの現状、ドーラの空爆等取材。2004年3月、三度目のイラク取材。核施設と言われているツワイサの現状とサダム時代の秘密取材。ナジャフ、サドルシティでの戦闘取材中に事故に遭い、帰国。2006年からイラク帰還兵たちと連絡をとり始める。2008年3月、帰還兵たちによるウインターソルジャー(冬の兵士)と名づけた公聴会取材。

# 冬の兵士 - - 良心の告発

## Winter Soldier

### シナリオ



この作品は2008年3月13日から  
16日まで開催されたイラク帰還兵による  
証言集会・ウインターソルジャーでの証言と  
独自に行った取材をもとに  
イラク戦争の本質を検証したものです

### 冬の兵士・Winter Soldier・良心の告発

これはアメリカ合衆国の公文書館です。

ここには、この国の歴史をつくりあげた独立宣言や憲法の原文が展示されています。

帰還兵たちデモ「戦争をやめろ」

イラク戦争開戦の5目年目、イラクから帰還した兵士たちが、やってきました。

帰還兵「私は国を愛している。みなさんも愛しているでしょう。私たちは国を愛している。戦争をやめよう、今すぐに」

帰還兵の一人が「独立宣言」を朗読。

アダム・コケシュ「権力を乱用した、明らかな、専制政治が行われた時、その政府を倒すことは、人民の権利であり義務である」

デモ市民「民主主義って何？」

アダム・コケシュ「歴史に学ばないものは間違いを繰り返す。歴史が教えるのは我々が歴史から学んでいないということだ」

「アメリカよ目を覚ませ」

「我々は米軍のイラクからの無条件撤退を要求する今すぐに」

このデモしているのは反戦イラク帰還兵の会のメンバーです。彼らは、このデモの3日前まで、ある集会に集まっていました。それは、帰還兵達がイラク占領の本当の姿を証言するための集会でした。

ポスター・ウインターソルジャー・冬の兵士



### 反戦イラク帰還兵の会・アダム・コケシュ

「我々帰還兵は責任を果たすため証言することが重要なのです

我々はマスコミから情報を得ていますが、多くの記者は国防総省の発表を切り張りするだけです、調査報道をしません、アメリカ国民の名のもとに行われている多くの悪があるので、語る必要があります」

ワシントンDC郊外

全米労働大学

イラク帰還兵たちの証言集会

こんにちは、ジョン・マイケル・ターナーと申します

海兵隊で機関銃手として従軍しました

「海兵隊、入隊したらいつまでも」と言われますが

「くそつたれの海兵隊」とも言う。 やってやれるか おさらばだ



## 第一章・戦闘モラルの崩壊

ジョン・マイケル・ターナー



「2006年4月18日、初めて人を殺しました、何の罪も無い男で、名前もわからないため、私は「太った男」と呼びました、自宅帰る途中の男を、彼の友人と父親の前で撃った、首のここらを撃ったので、一発では死にませんでした、男は叫びながら、私の目をまっすぐに睨んだ、私は一緒に任務についていた友人を見て、「このままにしてはおけない」と言い、もう一発撃って

殺しました、男の死体は7人の家族たちに運んでいきました、

私は謝罪したい、罪の無い人々に怒りをぶつけ破壊した、これでいいと思っていたが、そうではない、人々にこの戦争で何が起きているか知らせない限り、人は死んでいく、私は後悔している、もう私は以前のような怪物ではありません」

ケリー・ドーアティー



2003年・イラクで従軍

2004年・反戦イラク帰還兵の会を設立

ケリー・ドーアティーさんは、2003年にイラク戦争に従軍。

2004年に、仲間と共に反戦イラク帰還兵の会を設立しました。

「体験を語るだけでなく、責任と良心を持って、真実を語るという課題に直面しています。私達は占領を終わらせるためマスコミの情報操作と戦い続け、帰還兵への福祉の実現とイラクへの賠償を求めます。反戦イラク帰還兵のメンバーは立ち上がってください」

反戦イラク帰還兵の会は、占領軍のイラクからの即時撤退、イラクへの賠償、帰還兵への福祉の実現を目的に結成されました。

そして、2008年3月13日から16日まで、厳しい冬の時代に戦う兵士と言う意味のウインターソルジャーと名づけた集会を開催し、戦争の体験を証言しました。

証言は、多くのテーマで行われましたが、一番、最初は、敵を攻撃するルールである交戦規定についての証言でした。

交戦規定（敵を攻撃するルール）

## アダム・コケシュ

「アダム・コケシュと申します。2004年2月から9月までファルージャで従軍しました。開戦前、戦争に反対でした。国連でパウエルが言った嘘や情報操作信じましたが、開戦すべきとは思わなかった。しかし、米国は混乱を収め、本気でイラク国民の役に立とうとしていると考え、命を賭けて戦争に参加しました。

これはイラクに派遣された時に渡された交戦規定のカードです、次のような条件で敵の軍を攻撃することができる、交戦前に明確な敵の確認が必要である、明確な確認とは、合理的で間違いが無いこと、とカードには書いてある。攻撃対象は法的に正当な軍事目標。

これを胸のポケットに入れておくことになっていた、

ファルージャを包囲したとき、交戦規定は下着を変えるよりも頻繁に変わった、最初は、交戦規定を守ることを求められたが、怪しいものは射殺することになる。双眼鏡や携帯電話をもつもの、ついには誰でも攻撃対象となった、現地に着いてから数日たつてある事件が起きた、

検問所で銃撃行動があった、最初の写真をお願いします、これは検問所に近づいた車です、怪しい

車が高速で来たといわれ、大口径の機関銃で撃ちまくった。

減速しないものはすべて敵の戦闘員だとみなした、銃弾はバンパーからエンジンを破壊、このイラク人の胸を撃ちぬき座席まで破壊した。車のそばで撮影した私の記念写真です、居合わせた海兵隊員全員が、かわるがわる写真を撮ったのです」



## ジェイソン・ウオッシュバーン



「ジェイソン・ウオッシュバーンです。海兵隊の伍長で、4年間に3回イラクに派遣されました、派兵のたび、交戦規定が変わりました、振り向くたびに交戦規定が変わっている。ある女性が通りかかり、大きな袋を持っていた、こちらに向かってくように見えたので、私たちは、MK19銃をぶっ放した、粉塵が収まると、その袋には食料品がいっぱい詰まっていただけだと分った、

我々に食料を持ってきた女性を粉々にしたのです。

暗黙の了解のもとで奨励されていたことがあった。証拠として残すための武器やシャベルを持っていくことです、爆弾を埋めるために使われるシャベルを持っていき、市民を間違っ射殺した時、それを死体の上に置けば、武装勢力だったと言える、友人が言ったように、イラク人がシャベルや重そうな袋を持っていたら、撃っていいと決められていた、だから、シャベルや武器を車に積み、市民を殺害した時に死体の上に置き、交戦規則に従い、掘っていたから撃った、と言うのです」

## J・ウエイン・レミュー

「J・ウエイン・レミュー、反戦イラク帰還兵の会のメンバーです、海兵隊歩兵部隊で4年10ヶ月勤め、軍曹として名誉除隊しました、イラクに3回派遣され、侵略開始時にも参加しました、正しい交戦規定には、軍の正当化という目的があります、軍が抑圧ではなくて保護していると思わせるのです、交戦規定を守ることで、反占領運動を防ぎ、占領を諸外国から非難されないようにします、ところが、イラクでアメリカは、それをしませんでした。

この事実を否定するものは、嘘つきかばか者です。

2004年4月、アンバール州の戦闘に、私達の部隊は参加しましたが、銃撃戦が始まると、司令官が、このように命じました、イスラム教徒の衣装のものは、敵対しているとみなし撃ってよし、その1,2時間後、路上にいるものはすべて敵の戦闘員とみなせ、その命令が出た日の午後、街角で



武器を持たないイラク人が戸口から出てきた、海兵隊員がライフルで狙いをつけたが、心理的拒否反応のためか、そこで私の記憶が消え、次に思い出すのは、男の死体を跨いだことです、男が出てきた部屋は倉庫で、スナック菓子あるだけでした、どこにも武器は無かった、数週間後、司令官は、敵を 100 人殺したと言いました、その数には、町を歩いていただけで射殺された人が含まれています。

このころには二回目、三回目の派兵となる海兵隊員の多くが、仲間が死ぬのを見て深刻なトラウマに苦しんでいた、そのため、非戦闘員としか思えない人を撃つようになった、道路わきで爆弾が爆発したことがあり、海兵隊員が銃を撃ったが、数百メートルも離れた数台の車に向けて撃った、遠くて誰が乗っているのかもわからず脅威の無い車だった」

ウインターソルジャーを取材した、田保寿一は、ジェイソン、ウエイン、レミューさんの証言を聞いて、イラクのファルージャで取材していたとき起きた事件を思い出しました。

路肩で爆弾が爆発した時、アメリカ兵は、周りの人や車に無差別射撃したのです。

爆弾がしかけられていたドラム缶

銃撃する米兵

米兵に射殺された被害者の家

お父さんが...

Ｊ・ウエイン・レミュー

「無差別射撃をした兵士は、司令官が野菜を担いで歩いていた老婦人を射殺したのを見たことがありました、彼はその女を撃てと命じられたが断ったので、司令官が撃った、危険の無い車を彼が撃ったのは、司令官にお手本にただけでした。

交戦規定は頻繁に書き換えられその内容は矛盾するものになりました。規定が厳しい時には守らず、市民を銃撃して殺しても報告されません。私達は、自分を守ることが精一杯でした。解放したはずの市民が誰でも爆弾で攻撃してくる危険がある。

誰が敵か分からず、命をかける使命も無いので、海兵隊員は交戦規定を冗談か、無事、故郷に帰るためには、誤魔化すものと考えていた、交戦規定の運用がでたらめなのは戦略が間違っているためで、モラルが無くなった、恥を知るべきです、イラクから直ちに軍を撤収すべきで、その理由の一つが交戦規定の乱用です。」

交戦規定の問題で15人の帰還兵が証言し、アメリカ軍がイラク市民を無差別に殺害している事実を公表しました。

ジェイソン・ハード

「戦争を終わらせるための大きな一歩が始まりました。反戦イラク帰還兵の会への入会者が激増し、たくさんの帰還兵が来て兄弟姉妹の契りを結び、長く続く友情を育んでいます。

ウインターソルジャーが明らかにしたいのは、イラクで起きていることは、個人ではなく政策の責任だということです、証言者の軍歴を見れば、彼らが優れた兵士だったとわかります



証言者はみんな、国を愛する愛国者です、ウイタンーソルジャーに来た市民もみんな国を愛しています、アメリカを信じていのです、アメリカ精神である人間らしい国を作るとこと、それを、私たちは目指しているのです。」



**ジェイソン・ハードさんの家で話を聞くチャンスがありました。**

自宅のジェイソン「これを見てください、これが私です、そうとは見えないけれど、我々の部隊の写真です。」

ジェイソン「マイク・ロビンソンさんです」

**マイク・ロビンソンさんは、州兵の歩兵機関銃部隊として、バグダッドの北にあるバラド空軍基地に派兵されました。**

マイク「バラドは旧イラク軍の空軍基地で、我々は飛行機用の巨大なコンクリート製格納庫に住みました、自分のした作戦について話したいと思います

これがバラド基地です、ここに戦闘用ヘリコプターが駐機していました、それをテロリストと呼ばれる人たちが、毎晩、ロケット砲で攻撃してきた、基地の南東はブドウ畑だが、私たちはヘリコプターを攻撃したのを見つからなかったが、イラク人が畑を見ながら歩いているのを発見した、50才くらいの男で、背中に機関銃を背負っていた、彼は草むらに何かを感じ、我々の物音が聞こえたのだろう、銃に手を伸ばした、怖かったのだろう、交戦命令が下り、私は彼に向かって5発撃った、他の部隊も銃撃、彼は虫の息で、トラックに乗せると亡くなった、

彼は怖がっただけで悪いことはしなかった、私だって犯罪を犯したわけではない、彼は撃とうとしたし、私は命令された、このことで苦しんでいる、普通の市民を殺したのだから」

ジェイソン・ハード「我々はたくさんの罪を犯した、そのため、彼の言うように明けても暮れてもその経験が思い出される」

マイク・ロビンソン「2003年6月20日、強制捜査の任務につき、機関銃を持ってビルの中で仲間を援護している時、戦闘ヘリコプターから不審者発見の知らせを受け、階段を下りているときに、IED = 手製爆弾が仕掛けてあり、足を吹き飛ばされ帰国することになった、帰国して市民生活を再開したが、怒りの発作がおきて、妻とは殴り合いの喧嘩をして、数回逮捕されそうになり、離婚した、職も失った、怒りの発作が起きて、仕事が続かない、家も失った、妻が出て行き家賃が払えなかった、友人を回り、路上やどこにでも寝た」

ジェイソン「それは辛い」

マイク「車にいるときに、路上の人を銃撃する幻覚を見る」

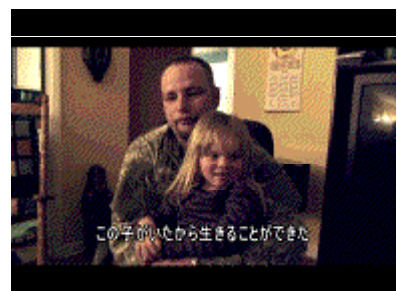
ジェイソン「駐車場で？」

マイク「銃撃し、自分にだけに爆弾の音が聞こえる、これは何だろうね？あたりは血の海で血しぶきがかかる、

毎日死ぬことばかり考えていた、頭はどう自殺しようかという考えでいっぱいだった、去年の1月19日、私の誕生日、一人ぼっちだったから、酒場で飲んで酔っ払い、狂ったようなスピードでジープを走らせ、タイヤが外れてしまった、警官が来なかったので、銃で頭を吹き飛ばそうと思いながら歩いていると、女友達のエリザベスから電話があり、励ましてくれたので、自殺しないですんだ。それから3才の娘と会い、エリザベスの娘だが、彼女が私の生きる理由になった。サラ、来てくれない？

サラは、3才だが、この子がいるから生きることができた。この子がいなければとっくに死んでいた。」

ジェイソン「私の場合、うつ病がひどくて、ガールフレンドがと



でも心配したがどうしようもなかった」

マイク「心的外傷後ストレス障害はとても辛い、怒りの発作、うつ病、自殺を繰り返す、治療はほとんど不可能だ」

ジェイソン「兵士を募集する時、大学奨学金が貰える、職業訓練になり、各種給付金もある、家が持てて友人ができると言うが、イラク市民を虐待し、ひどく傷つけるという事実は言わない、現実には足を負傷する場合もあり、ホームレスになる人までがいる」

交戦規定の証言が行われた次の日、3月15日、反戦イラク帰還兵の会のカミロ・メヒア議長が、精神的に耐えられず、記憶が消えてしまうほど恐ろしいことをしてしまったという証言をしました。

### カミロ・メヒア IVAW 議長

「息子と車にいた父親の首を機関銃で打ち落としました、首の無い死体のそばに人が立っていたが、その表情やどんな人だったかが思い出せません、人から死体のそばに立っていたのは彼の息子で子供だったと聞きました、父親の首を落とされた息子の顔を記憶から消し去ったり、イラク人の死体と写真をとるのは、人間性を喪失しないとできないことです、戦争は人間性を奪うのです、我々の世代は、100万人のイラク人が死に、500万人が難民となり、米兵は4千人死亡、6万人近く負傷、しかも我々は精神的病気、心的外傷後ストレス障害を抱えて帰還した、戦争はこの国の一つの世代をまるごと非人間化し、イラクをまるごと破壊した、我々の人間性を取り戻すため、イラクから軍隊の無条件即時撤退を要求する、すべての帰還兵に福利厚生を要求し、イラクの人々が自ら国を再建するため補償することを要求する」



傍聴市民「戦争の恐怖の体験を話すことは勇気のいることです、若者達の苦しみの証言を聞くのはとても辛い、ウインターソルジャーは、反戦運動に大きな希望をもたらしました、若者達の勇気に感謝します」

反戦イラク帰還兵の会メンバー「力がみなぎっています、やる気満々になりました」

アダム・コケシュ「始めたばかりですが、とてもうまくいっています、愛と力が漲っています」

### 2008年3月19日・ホワイトハウス前

#### アダム・コケシュ

「私は、アダム・コケシュ。2004年2月から9月まで、ファルージャで軍曹として従軍した、その間、交戦規則が大きく変わった、交戦規則は、イラクでの海兵隊の最も大事なモラルです、そのモラルが生き残るために矮小化された、軍務につく勇敢な男女が、正義か生還か、二者択一の状況に置かれているのは犯罪だ、だから、我々は、アメリカの大統領と副大統領を告発する。」



デモ行進の歌「反戦イラク帰還兵の会が、何でデモをしているかわかるかい。我々の兵隊を帰国させるためだ。血も油も、もうたくさんだ。」



なぜ米軍は本来の「交戦規定」を守らないのか？

2008年1月27日

ボストン

「反戦イラク帰還兵の会のリアム・マダンさんです。」

リアム・マダン「反戦イラク帰還兵の会は100人の帰還兵による集会を開きます。」

リアム・マダンさんはウインターソルジャーの資金を集める活動をしました。

「この集会はとても重要です。」

ウインターソルジャーへのカンパ

リアム・マダン「嘘が根底にあり、道理に合わず、必要の無い苦しみの原因だからこの戦争に反対します。」

この日、家の外では、戦争に賛成する人たちがデモをしていました。

デモをする市民「平和主義者は国を守らない、アメリカ人を殺す敵を支援してくれてありがとうよ」

「反戦イラク帰還兵の会は嘘つきで、裏切り者で、暴徒だ、恥を知れ」

「911でイスラム教徒が2千人以上の米国人を殺したんだぞ。」

お前らは敵に抗議をしたのか？

911はどうだったんだ。アメリカ人を殺したやつらに抗議をしたか」

911同時多発テロ事件の首謀者への報復としてアメリカはアフガニスタンに侵攻しました。

そして、イラクが大量破壊兵器を持ち、しかも、アルカイダと繋がっているという理由で、イラクに侵攻することになります。

しかし、イラクには大量破壊兵器がなかったし、フセイン大統領がイスラム原理主義組織を弾圧していてアルカイダとのつながりもなかったことがわかり、イラク占領の理由は嘘だったことが明らかになっています。

## 第二章 銃口の先に見たもの

2008年3月15日

全米労働大学

イラク帰還兵による証言集会・ウインターソルジャー三日目

3月15日、イラク帰還兵による証言集会、ウインターソルジャーにおいて「差別と戦争、敵を非人間化する」というテーマで証言が行われました。

「反戦イラク帰還兵の会のリアム・マダンです。ウインターソルジャーによろこそ。差別と戦争、敵を非人間化する、に参加して下さりありがとうございます。この問題を考える場を持ち人々に関心を持ってもらうことは重要です。人間性を剥奪する差別と戦争は深く結びついているのです。」

ジェフ・ミラード、反戦イラク帰還兵の会、ワシントン DC 支部長です。

ジェフ・ミラードさんはニューヨーク州、州兵でしたが、2004年から13ヶ月間イラクに軍曹と派兵されました。

反戦イラク帰還兵の会

ワシントン DC 支部長・ジェフ・ミラード

「911以降に戦地に派遣された兵士の間では周知の事実ですが、軍では人を非人間化するためハジという言葉を使います、イラク人やアフガニスタン人に限らず、自分たち以外の人間をハジと



呼ぶ。2005年の夏、42歩兵師団の作戦地域の交通管制地区で銃撃がありました、それはイラクで毎日起きています、スピードを出して来る車があり、機関銃手が脅威と判断し、50口径の銃弾を200発撃ちました、母親、父親、子供二人を殺し、男の子は4才、女の子は3才でした。夕方、将軍に対する報告会で、担当官がこの件を説明しました、その時、司令官のロシェル大佐が、部下の方を向いて、ハッジの馬鹿が運転を知っていたら、こんなクソみたいなことは起きなかった、と言った、周りは将校や下士官たちばかりで、私が一番下の階級でした、誰も抗議しません、首をかしげるものもおらず、全員がそのとおりだと思った、ハッジの馬鹿のせいで、こんなクソみたいなことが起きた、信じられませんでしたが、でも本当なんです、このことが忘れられませんでしたが、ハッジという言葉が聞こえるたびに、あたりを見渡しました。あの射撃手は、このことを一生背おって生きていく、あの日、皆殺しにされたイラク人家族、それをロシェル大佐は考えない、こんな人種差別と、非人間化が、戦争の最高司令官に始まり、最下層の兵士まで浸透している。他の証言者のみなさん、また、表には出られないけれど、証言を寄せてくださった皆さんにお礼を申し上げます、制服を着ていた時もこれほど大きな誇りを感じたことはありません  
アメリカの歴史で最高の愛国者である皆さんと一緒に証言できて光栄です」  
ハッジとは、聖地であるメッカを巡礼したイスラム教徒のことで、地元の人にとっては尊敬すべき人を指す言葉です。それをアメリカ軍は軽蔑すべき人という意味で使いました。



アメリカ軍のイラク占領政策の根底には差別感情がありました。  
そして、住民の人権をないがしろにしています。

### ジェイソン・ハード



「ジェイソン・ハードと申します。テネシー州兵として10年間働きました。バグダッドに2004年11月から翌年の11月まで派兵されました。パトロール中に、庭の手入れをしている女性を見かけた、通訳が、サラームアレイコム、神と平和があなたと共にありますように、と挨拶をすると、神も平和もあなたには無い、と彼女は怒って言うので、なぜ怒っているの？私たちはあなたを

守っているのです、と言った、その女性は、数ヶ月前、夫が米軍の車列に近づいたという理由で射殺されたと話した、夫は、武装勢力でもテロリストでもなく、家族のため働く男だった、さらに悪いことには、その数週間後、特殊部隊が、この女性が武装勢力を支援しているという情報を得て、彼女の家を搜索、彼女と子供たちに手錠をかけ、床に転がし、息子を拘束連行した、二週間、彼女は息子の生死も知らされませんでした。二週間後、特殊部隊は、彼女の息子を、家のドアの前に投げ捨てていった

謝りませんでした、間違っていたことに気がついたわけです、こんなことがイラクでは毎日起きて、人々の生活を破壊している

控えめな統計数字でも、イラク人の大半が連合軍に対する攻撃を支持しており、我々が出て行くことに賛成で、ほとんどのイラク人は我々が暴力の原因だと見ています」

「我々は米軍や連合軍と戦う集団を増やしてしまった」

### バグダッド西・ファルージャ

市民「アメリカは出て行け」

「海を越えてきた軍隊に言いたい。あなたは隣人ですか？親戚ですか？我々はどんな人からも占領されることを拒否します。我々には自分の国を治める権利があります。」



2003年10月

リアム・マダン「占領を拒否した町は破壊されるべきだとされ、米軍は武装勢力の町だとレッテルを貼り、攻撃を正当化している」

### ファルージャ掃討作戦

アダム・コケシュ「私達は、三日間の準備をして出発できるようにしると真夜中に命じられた。2004年4月、どこに行くのか知らなかった。これはブラックウォーター社の保安要員が殺害され焼かれて、遺体が橋につるされた直後だった。」

### 2004年4月、ファルージャ掃討作戦開始

アダム・コケシュ「夜間外出禁止令を出した時、夜にはあらゆるものを撃つことが許された

写真を見せてください、ファルージャを包囲したとき、我々は女性と子供を出そうとした、立派なことをしているつもりだった、ファルージャの西、ユーフラテス川北の橋で、男は14歳未満でないと出さないと決めたので、男達を追い返しているところです、寛大なことをしているつもりだったが、私はひどい意思決定を家族に強制したと思うようになった。」



Q、「米軍は女性や子供も殺しました」

コケシュ「それを目撃していませんが、25万人の住む町が膨大な爆弾で攻撃された。ですから、女性や子供も殺されました。ファルージャでしたことで、私をもっとも後悔しているのは、停戦をして市民を避難させるチャンスをつくり、ここは戦場なので、残れば攻撃を受けると知らせ、女性と子供を外に出そうとしたが、多くは出なかった、女性と子供が町を出るとき、14歳以上の男性は出さないで、家族の半分を残して町を出るということを強いた。

そして行くところも無いのに、「あっちにモスクがあるよ」と言って橋を渡らせた。選択肢が無かった。たくさんの家族と一緒にいることを選び町に留まった。アメリカの政策に責任がある。」

### マイケル・リュデューク



「私はマイケル・デュークと申します。海兵隊第一大隊、武器小隊に属し、2004年6月から12月までイラクに派遣されました。2004年10月末、僕の中隊はファルージャの基地近くにあるイラク訓練センターに転進した。二回目のファルージャ侵攻・亡霊の怒り作戦のためでした。攻略戦まで訓練を受けていると、ある日大隊の法務官が全員を招集した。彼は大隊で

軍法の最高権限を持つ人物だった。従軍記者がいないことを確かめて法務官はファルージャの交戦規定を指示した。何が敵対的行為で、何が敵対的意思かについては、これから下士官の中で最も階級が低い兵卒にも、判断をまかせるということだった。また発砲偵察という戦術を奨励した。この戦術では家や建物を調べるため踏み込むとき、危険や不安を感じたらどんな攻撃をしても良いと許可された。これで僕たちのやり方が本当に大きく変わった。それまでは、攻撃の段階的拡大とやり方で、厳しい条件の下で武器を使った。しかし今すべての住民が敵対しているみなす。法務官は最後にこんな質問をした。海兵隊の諸君 武器を持つ人間がいたらどうしますか？誰かが声を上げた。銃を撃つ？違う、発砲し威圧することと射殺することは別だ。もう一度質問する。武器を持つ人間を見たら？殺す。双眼鏡を持つ人は？殺す。携帯電話を持つ人は？殺す。何も持たず、敵対行為が無くても、走っている人、逃げる人は何か画策しているとみなし、殺せ。白旗を掲げ命令に従ったとしても、畏とみなし殺せ。

ファルージャで僕たちは、その交戦規定に従い最初の三日間特に激しい戦闘が続いた。ブルドーザーと戦車を使って家屋を一つ一つひき潰し、瓦礫の上を歩いた。戦闘が始まって数日後に町は静かになった。僕たちは家屋の中に隠れた。数時間から一日二日も隠れたので退屈し癩癩を起こし、やっちまおうぜと、人間は撃ちつくしたから、犬や猫や鶏など動くものは何でも撃った。道に放置されている死体に名前をつけている隊員がいた。腐乱のランディ、胴体トニー、道に横たわる死体の頭を標的に銃の照準を調整する隊員もいた。狙いをつけて撃ち、左にそれるなら照準を調整してまた撃った。みんなでモスクの屋根にいた時、前日占拠したばかりのモスクで、陽がさしていた。さほど遠くないところに家があり、その地下室に家族全員が隠れていたようで、男数人と女数人、たくさんの子供たちが出てきて、手を振ったので、武器を持たないことを知らせようとしているのだ、と思ったが、隊員の一人がそれを見て発砲した。

家族を狙ったのかどうかはわからないが、彼らはみんな逃げもう見ることはなかった。

いろんな家に入り込み、そこにあったアルバムの家や近所の写真を見た。今の状態と写真を比べ僕たちは大笑いした。

街の下水システムが爆弾で破壊され下水が道路にあふれ出ていた。その下水に死体がいっぱい溜まり、恐ろしい光景だった。前日何人かを射殺し、残りの人たちを拘束していた。その中に夫を殺された女性がいて、彼女の叔父か父親は目が見えなかった。僕たちは二人を家まで送り返すことになったが、二人は遅れてついてきて足手まといだった。途中まで来たところで二人を下水が溢れた道に置き去りにした。

私は良いことをしたくて軍隊に入った。人々の役に立ちたかった。イラクでそれができると思った。私は若すぎて、浅はかで、間違っていた。何かあったことで僕が大きく変わったというつもりはありません。自分がしたいと思っていたことができたこともあったし、誇りを感じたこともあったが、みんなやるしかないからしていた。正しいことも間違ったことも、命令されれば、やるしかなかった。」

**アダム・コケシュさんは 1999 年、高校卒業後、17 歳で海兵隊に入隊。**

**海軍褒賞メダル、戦闘リボン、国家防衛メダル、イラク従軍記章を授与されています。**

Q「なぜ、米軍はファルージャ市民と戦ったのですか？」

コケシュ「そうではなくて、少なくとも、米兵側の認識では、武装勢力とだけ戦っているつもりだった、米軍にとって、ファルージャ市民は意図した攻撃目標ではなかった、すべては上層部の作戦のせいでおきた、市民を殺そうと考えた兵士はいなかったが、市民を殺害した、ファルージャ市民を、ひどく軽視した上層部の作戦が、ファルージャにいるものはみんな武装勢力かその同調者だとみなした」

Q「武装勢力とは誰のことだと思いませんか？」

コケシュ「武装勢力とは、米軍の占領にうんざりしている人たちです、私は 17 歳で海兵隊に入った、もし自分が 17 歳でイラク人だったら、占領軍を自分の国から追い払うため武器を手にとらないかもしれないが、自分のとるべき立場はわかる、12 歳から 17 歳で、男としてまともに育っていれば、自分の国が外国に占領されて、いい気持ちではられない。」

**占領に反対するファルージャ住民**

**「ブッシュよ地獄に落ちろ」**

**「ブッシュの車はこのとおりだ」**

**ファルージャでアメリカ軍は占領直後から住民を殺害したり拘束連行したりしたので、激しい反占領運動が起きていました。**



2004年12月

アメリカ軍はファルージャにアルカーイダグループだと名のザルカウイの拠点があるとして攻撃しました。

2004年12月

米軍に殺害された人々

住民「米国の言う民主主義は、こんなことをする」

住民「私たちがアメリカを攻撃しましたか？いいえ、アメリカが私たちを攻撃したのです。

私たちはアメリカを攻撃していません。アメリカはザルカウイがいるから渡せと私たちの町に侵略してきたのです。でも、私たちは、どこからザルカウイを連れてくればいいのですか？」

記者「ザルカウイはいないのですか？」

住民「私たちはザルカウイなど知りません。」



田保「ファルージャとアルカーイダの関係を言う人がいますが？」

コケシュ「政策を支持させるためアメリカ市民を情報操作している、アルカーイダは、アメリカ人を怖がらせる亡霊のひとつだ」

リアム・マダン「ある人がテロリストと呼ぶ人は別の人にとって自由の戦士だ。戦争を正当化するため戦争の相手側の市民を人間的でないものと思わなければならない。今、アメリカではテロリストが人間的でないものだ、テロリストは顔の無い敵で、破壊すべきもの

だ。テロリストの定義は市民を標的に暴力を行使するもののことだ。米軍は多くの市民を殺している。戦争は大規模に市民を殺害する、私にはテロリストと軍隊の違いがわからない」

カルロス・ハリスさんはイラクに二年間 派兵されました

リアム・マダンさんの友人・カルロス・ハリス



「最後にイラクにいったとき、路肩爆弾で友人が殺されました。輸送部隊が襲われた。」

取材者「誰があなたたちと戦っているのですか？」

カルロス・ハリス「とても変化しました。最初は共和国防衛隊でした、それから多分アルカーイダになりました、今はすべての人です。シーア派、スンナ派の民兵、つまりすべての市民です。多分アルカーイダはまだイラクにいるかもしれないが、米軍が戦っているのはアルカーイダとだけじゃない、イラクの住民と戦っているのです」

アメリカ軍はイラクの住民と戦っています。

そのため、法的に正当な軍事目標だけを攻撃するという交戦規定を守れず、住民を無差別に殺害するという事件を日常的に繰り返すことになっています。

そして、敵は大人の男だけではありません。

子供が、攻撃してくる事件も起きているので、少女の持つバッグまでも検査していました。

アメリカ軍は、女性や子供までも相手に戦争をしています。

ファルージャの武装勢力の活動を描いたとしてイラクで配布されているCDには機関銃らしいものを持つ子供の映像がありました。

マイク・ロビンソンさんは、子供が攻撃してきた事件があったと話してくれました。

マイク・ロビンソン「バド基地の正面入り口で警備をしていた時です、幼い少女が門に向かって歩いてきた、7歳の少女です、通訳が、止まれ、とイラクの言葉でいった、少女は止まらない、ど

うしたら良いのか？「止まれ」と言って止まらない子供は、射殺するしかないのでしょうか？命令が下り、彼らは7歳の少女を射殺した、調べると彼女の胸に爆弾がつけられていて、服で隠されていた。お父さんが娘に自殺攻撃をさせた。5人の兵隊がそこにいた。お父さんが娘の命よりも米兵の死を望んだ…。射殺してしまった…。命令されたのが私でなくて良かった。」

ジェイソン「戦場に行ったことのない人は、正当防衛だ、と言うと思うよ、しかし、殺さなければ殺されていた、と言われてもどうにもならない」

マイク「イラクでは人間性が踏みにじられてしまった」

ジェイソン「子供を殺した事実は忘れられない、爆弾がつけられていたとしても忘れられない」

マイク「5人のためだとしても辛い」

ジェイソン「それで罪の意識を持っている」

マイク「どうしたら良いだろう、頭を離れないことがある、気になってしかたがないのは、なぜ少女にそんなことをさせたのか、私にはサラがいるから親の気持ちがわからない、その少女もかわいかった」

## Winter Soldier 良心の告発

### 最終章・軍隊という監獄

ウインターソルジャー最終日 2008年3月16日

証言テーマ 軍の瓦解

#### クリストファー・ゴールドスミス



「クリストファー・ゴールドスミス軍曹です、私は今日、戦争の囚人の話をしたい。この囚人のことを米国人は知らない。

この写真は10歳の私で、迷彩服を着て、認識票を下げ、ボーイスカウトの敬礼をしている。

この少年はイラクで死んだ。これは2003年のクリスマス直後、志願した誇り高い兵士だ。アメリカの憲法を防衛しようとした。この少年は死んだ。

私はマンハッタンから20分のニューヨークの町に住んでいます、

9/11に貿易ビルが崩れる時の煙が見えた。9月12日、私はピザ店で立ち上がり、中東の人間をみんな殺したいと言った。中東は核兵器でなくしてしまえと私は思った。マスコミがそう思わせた。マスコミが不当な差別観を私に植え付けた。私は人を殺すため軍隊に入った。19歳でイラクに派兵され、8ヶ月間、サドルシティに配備された、そこはバグダッドのスラムで、サダムに無視されたばかりでなく、アメリカにも恐ろしいほど無視されている、住民は私達を嫌っている、私達が自由、水、食料、仕事を約束したのに、2005年、私が見た状況は今も同じだが、電気は一日、2時間から4時間、いきあたりばつりに供給されるだけだし、下水が水道に混じっているのに、2005年には、下水道施設を建設している業者はいなかった。

恐ろしいほど暑いところでは、昼間に外に出ようとは思わない、夜、米兵が巡回し、外に出るな、人と話すな、喫茶店に集まるなどと言う、夜間の外出は違法だから、夏のサドルシティは監獄だった、320万人のサドルシティの住民は戦争捕虜だった。」

#### バグダッド東部・サドルシティ

ゴールドスミスさんは、バグダッドのサドルシティに派兵されましたが、ここは占領に反対する運

## 動が最も激しい地区の一つです



ゴールドスミス「私の陸軍褒章メダルの業績評価を読みたい、業績ナンバー3、ゴールドスミス上等兵は、サドルシティのパトロール中、イラク軍の援軍を求められ、ゴールドスミス上等兵は武器の配備を率先して行ったので、イラク軍は、敵の武装勢力を逃さず、破壊することができた、私は、その日何が起きたのが正確に言いたい、今読んだことは事実だが、書いてないことがある。私は軍用者の中で立っていたが、部隊長がそばにいた、彼は黒い服の武装勢力を見たので撃った、銃弾は当たって敵を殺すか、負傷させた、部隊の最高責任者が銃撃したので戦闘が開始され、何かしなければならなかった、若い少年がいた、右のビルの屋上にいた、少年は米兵を嫌い、棒を機関銃のように構えて、撃つまねをした、私は銃を向け、彼を敵だと確認した、銃を向けながら、数分間、私は考えた、イラク人は嫌いだ、石やレンガを投げってくる子供は嫌いだ、この子を殺せば手柄になる、数百万の中のたった一つの命じゃないか。引き金は引


かなかったが、それまでに長い時間がかかった。私は6才の少年を、誰かの息子を殺そうとした。私は子供を殺しかねない、そんな立場に追いこまれていた。米国によるイラク占領で、そういう立場におかれ、マスコミがイラク人に対する嫌悪を煽った。イラクから帰国して酒を飲み続けた。軍を辞めて、大学に行くことだけが希望だった、しかし、その希望は、2007年10月に打ち砕かれた、ジョージ・ブッシュが新たに2,3万の軍を送ることを決めた、私の部隊は、その要員確保政策で拘束され、誰も辞められなくなった、軍と言う監獄から解放されると思い、最高に幸せだったのに、それからとても気がめいり、恐ろしいほど激しい苦しみの渦に落ちこんでいった。自殺しようと思ひ、薬を飲んで、ウオッカをもう飲めないところまで飲み、意識が無くなり、気がつくと、病院で担架に拘束されていた。私は結局、除隊したが、恩恵が受けられないという処分を受けた。それで大学給付金を失った、私にとって唯一の希望は、大学に入れるということだったのに、2007年9月、大学に入れなかった、入学金が払えなかったのだ、病院通いや不安定な精神状態で、仕事を見つけることはとても難しい、私は水曜にピザの配達をしている、ピザ配達人だ、私は軍曹でリーダーを務め、自分がとても優秀な兵士と思っていたのに...。写真を見せてください、彼は要員確保政策の犠牲者です、この男の名前は明かせませんが、私の友人で、お見舞いに行った、彼は対人地雷を踏んだ、右足をほとんど失い、右耳の鼓膜が破れ、聴覚を失った。この男は私と同じ週に除隊できる予定だったが、その週に私の部隊は再配備された、だから彼に起きたことは、私に起きてもおかしくなかった。この人と私は一緒に1年間従軍したのでよく知っていた、病院に行ったとき、私は自殺未遂をしたことに罪を感じていた、病室に入るや、「従軍しないで悪いやつ」と彼に言われることを覚悟していたが、彼は私を見て、強く見つめて、「戦地に戻ったりはしないよね?」と言ってくれた。その言葉は、誰からも与えられなかったもので私の心を満たした。

あなた方にメッセージがあります。世界中の人が理解できる。平和」

## 2008年3月19日・イラク戦争開戦5年目

コケシュの腕の刺青「愛の力が力への愛に勝った時、平和が訪れる」  
「私は、国旗を逆さまにしている。なぜなら米国は今、国難に遭遇しているからだ、しかし、我々は、まだアメリカを愛している。」





マイク・ロビンソン  
Mike Robinson

証言時29歳  
所属・フロリダ州兵  
任務・機関銃手  
2003年3月～6月 バラド基地

バラド基地の正面入り口の警備  
をしていた時、幼い少女が門に  
向かって歩いてきた。  
7歳の少女だった。

通訳が「止まれ」とイラクの言葉  
で言ったが、少女は止まらない。  
どうしたらよいのか。

「止まれ」とはって止まらない  
子供は、射殺するしかないのか。

命令が下り、彼らは7歳の少女を  
射殺した。調べると彼女の胸に  
爆弾がつけられていて、服で隠  
されていた。

お父さんが娘に自殺攻撃をさせ  
た。

娘の命よりも、米兵の命を奪う  
ことが大事だと考えた....

その少女を射殺してしまった....



Winter Soldier  
 ウィンターソルジャー  
 証言者履歴



**アダム・コケシュ**  
 Adam Kokesh  
 証言時26歳  
 所属・海兵隊軍曹  
 任務・市民問題担当  
 2004年2月18日～9月14日 フォルージャ



**ジョン・マイケル・ターナー**  
 Jon Michael Turner  
 証言時22歳  
 所属・海兵隊 任務・機師助手  
 2006年3月～フォルージャ アブグレイブ  
 ラマディ



**ジェイソン・ウオッシュバーン**  
 Jason Washburn  
 証言時28歳  
 所属・海兵隊 任務・ライフル射手  
 2003年3月13日～9月11日 エッラ  
 2004年3月27日～2005年2月6日 ナジャフ  
 2005年8月6日～2006年3月31日 ハディーサ



**ジェイソン・ハード**  
 Jason Hurd  
 証言時21歳  
 所属・テネシー州兵 任務・衛生兵  
 2004年11月～2005年11月 バグアッド



**J・ウエイン・レミュー**  
 Jason Wayne Lemieux  
 証言時25歳  
 所属・海兵隊 任務・歩兵  
 所属・海2003年1月～9月 カルバラ  
 2004年1月～9月 フサイバ  
 2005年9月～2006年3月 ラマディ



**カミロ・メヒア**  
 Camilo Mejia  
 証言時32歳  
 所属・フロリダ州兵 陸軍  
 2003年4月～10月 ラマディ  
 イラク再編成を拒否し投獄された最初の兵士  
 (2004年2月21日～2005年2月15日獄中)  
 現在、反戦イラク陣営員の会議員



**ケリー・ドーアティ**  
 Kelly Dougherty  
 所属・コロラド州兵 軍警察部隊  
 2003年3月～2004年2月  
 友がベトナム陣亡兵。父に誘われ、04年7月平  
 塚のため陣亡者の会・VFWポストン組合に参  
 加。彼ら以後のイラク陣亡兵と共に反戦イラク  
 陣亡者の会・IAAWを設立。一時期IAAW議長。

Winter Soldier



# イラク戦争告発を記録

## 豊島の田保さん、渡米し撮影DVDに

昨年8月、米ワシントン郊外で「冬の兵士」と名付けられた集会が開かれた。イラク戦争の掃蕩兵らがマイクを握り、「米軍は交戦ルールをことごとく無視して戦争を勝ち」と訴えた。4日間に及んだ集会の様子をジャーナリストの田保寿一さん(89)＝豊島区在住＝が渡米し撮影、拙白インタビュも交えてDVDにまとめた。米軍でも大手メディアがほとんど報じることがなかった集会の、貴重な記録だ。

## 米帰還兵の証言追う

この集会は「反戦イラク掃蕩」ペトナムでの戦争犯罪を掃蕩兵の会」の主催で、約50人。すまために帰還兵が聞いた集会のイラク掃蕩兵が証言した。会「冬の兵士」にちなみ、同ペトナム戦争さなかの1971年、じ名前にした。



田保寿一さん

田保さんは、テレビ朝日系「ザ・スクープ」のスタッフだった91年、湾岸戦争でイラクによって犠牲になったとされた船まれの水鳥が、実は米軍の攻撃によることを明らかにした。

になる交通事故に遭いながらも、何度も行き来して取材を重ねてきた。

今回はイラク取材の精華を米側から検証したいという思いもあって、掃蕩兵に焦点を当てたことになったという。

集会「冬の兵士」では、一般市民が殺されていく様子が次々と明らかされた。

「ファルージャを包囲したとき、交戦規定は下着を符えるより厳密に変わった。最初は規定を守ることが求められたが、怪しい者は射殺することになる。双眼鏡や携帯電話を持つ者、ついに兵隊も対象になった」

別の元海兵隊員は言う。「ある女性が通りがかり、大きな袋を持っていた。こっちに来るように見えたので、袋をぶっ放した。粉じんが収まると、その袋には食料品がいっぱい詰まっていただけとわかった」。この掃蕩兵に比べると、兵士には偽装用の武器やシヤベルを持っていくことが簡易の了解で奨励されていた。間違っても市民を射殺したとき、死体の上にそれらを置いておけば「武装勢力だった」と言えるから」と。

集会での収録時間は40時間近く、個別インタビュの分も合わせ、DVD「冬の兵士

朝日新聞  
に掲載されました  
3月17日



イラク戦争について語る掃蕩兵たち—08年3月、田保寿一さん提供

良心の苦痛」には13人の元兵士が登場している。さらに米軍の攻撃で犠牲になったイラク人らの映像も加えた。

翻訳は、米国で出版された記録集の日本版を作っているTRUP(平和をめざす翻訳者たち)が協力してくれ、何度も改訂作業を続けた。最初は80分の半分以上がイラクの被害などを伝える映像だった。だが、TRUPや市民をつくる制作委員会では身を重ねたところ、「掃蕩兵の声を中心にしよう」という意見が強まり、完成版は全体の9割ほどを証言が占めた。

このような告発はしかし、簡単にできるものではない。情報機関につけ回される。風船などの給付金の支給が危うくなる。「殺すぞ」という脅迫……。田保さんが掃蕩兵の自宅を訪ねると、「あなたをここに来たことは、ビッグブラザーがみている」と言われたところもあるという。

田保さんは「内部告発は自分の人生、命をかけたものであり、人間としての立派さを感じてる。証言内容の検証は必要だが、米国がイラクでしたことが戦争犯罪であるなら、日本は支援してはならなかったと思う」と評している。

DVDは1枚3千円、申し込みは電子メール (tuyuno@eisi@gmail.com) へ

# IRAQ VETERANS AGAINST THE WAR

Support IVAW  
Click here to make a donation

Join our e-mail list

your email address

select your state

Subscribe

HOME

ABOUT IVAW

WHY WE'RE AGAINST THE WAR

MEMBER PROFILES

MEMBERS SPEAK

ACTIVE DUTY RESOURCES

VETERANS RESOURCES

IRR INFORMATION

SUPPORT IVAW

IVAW STORE

TRUTH IN RECRUITING

WINTER SOLDIER

UPCOMING IVAW EVENTS

MEMBERSHIP INFO

IVAW IN THE NEWS

IVAW PROJECTS

IVAW UPDATES

SIT-REP

PHOTO GALLERIES

CHAPTERS AND REGIONS

VIDEO

REQUEST A SPEAKER

CONTACT US

MEDIA INFORMATION

## IVAW Wants to See Obama Call for a Complete Withdrawal from Iraq

As an organization of Global War on Terror veterans and Active Duty service members, Iraq Veterans Against the War (IVAW) is pleased that President Obama is taking important steps to bring our fellow service members home. However, his plan to slowly remove combat brigades over the next 18 months and leave a remaining 35-50,000 troops throughout 2011 is a plan for almost three more years of an unjustified military occupation that continues to claim the lives and livelihoods of our troops and innocent Iraqis.

President Obama speaks of a change in mission, from a combat role to a support role, but yet still leaves room for "conducting targeted counter-terrorism missions" with a portion of the transitional forces remaining combat-ready. He also does not include a timeline for removing the more than 150,000 private defense contractors and mercenaries still in Iraq, nor does he address the question of disallowing permanent military bases.

His plan is also coming at a time when 17,000 more troops are being deployed to Afghanistan. He says he understands service members have "[born] the heaviest burden," but how is he alleviating that burden by removing troops from Iraq only to ask them to fight in an escalating occupation in Afghanistan? The longer that both of these occupations continue, the more difficult it will be to meet the needs of our returning veterans who are already suffering from inadequate care and a lack of resources.

We must ensure that U.S. control of Iraq, which today is accomplished primarily through military force, is not maintained over the longer term through the use of more subtle legal, financial, economic, or political means. "The Iraqi people deserve the dignity of full sovereignty and control of their own nation," says Kelly Dougherty, Executive Director of IVAW and former Military Police Sergeant, "and the only way to give this to them is by the immediate and complete withdrawal of all occupying forces from Iraq - this means withdrawing all military personnel, troops, and defense contractors, closing all military bases, ceasing air operations, and removing American interests intent on controlling Iraqi oil resources."

submit this page:

[Click here for more IVAW Updates](#)

© 2008 Iraq Veterans Against the War | Website by [The Action Mill](#) | Website funded by the Inavale Foundation

IVAW is a proud Affiliate of [Veterans For Peace](#), a 501(c)(3) charity, and welcomes your tax-deductible charitable contributions.

## 反戦イラク帰還兵の会の主張 “ IVAW Wants to See Obama Call for a Complete Withdrawal from Iraq ”

- (1) オバマの撤退計画なるものは、18ヶ月にわたって徐々に戦闘部隊を撤退させるというもので2011年まで3万5千~5万の軍隊は残り続ける欺瞞的なものである。
- (2) それはイラクをまる3年間にわたって軍事占領し続け、米兵とイラクの人々の命を奪い続けるものである。
- (3) 戦闘部隊が撤退し支援部隊が残るだけだとしても「対テロ戦争」の継続であることに違いない。
- (4) オバマは、15万人の民間戦闘員と傭兵(いわゆる“外注化された戦争”)の撤退スケジュールも示しておらず、恒久軍事基地を放棄するとも言っていない。
- (5) アフガニスタンへの17000人の増派は許されない。
- (6) イラクの石油資源などに対する野望を捨て、軍事基地の閉鎖を含め、全ての占領軍が即時無条件に撤退することを要求する。

# 田保寿一のジャーナリスト職務歴とイラク取材

## ジャーナリスト職務歴

1988年 テレビ朝日で派遣社員として働きはじめる。

1990年4月 報道局「ザ・スクープ」に配属される。

1991年3月 湾岸戦争終結直後に特派員としてクウェートに入り取材活動を行う。

戦争時、原油で水鳥が油まみれになった事件が起き、その原油はイラク軍が流したとされたが、現地調査の結果、米軍の製油施設への空爆によるものであることを立証。

1991年8月17日 「水鳥映像の謎」を放送、ギャラクシー賞を受賞。

1992年5月30日 アメリカでそれまでモラトリウムだった死刑が再開されたことから、その背景を取材し「アメリカの死刑」を放送。

9月5日 「アメリカの死刑」の反響が良かったことから「日本の死刑」を取材報道。

12月5日 「日本の死刑2」

2003年4月10日 「死刑再開」のおよそ1年にわたり死刑について取材、4回放送。

この取材記録は1994年「死刑の現在」として太田出版から出版された。

1999年 「ザ・スクープ」から、報道局「スーパーJチャンネル」に番組を変わり、2003年まで、ホームレスについての取材を4年間継続し報道していく。

2000年 ホームレスと平行して取材していた北朝鮮拉致問題取材中、よど号グループの元妻、八尾恵さんと出会い、「有本恵子さんを拉致した。」という証言を得る。

「有本さんの原状回復のためには、この件で逮捕されてもかまわないが、この事実の公表は自分の手でしたい。」という八尾さんの決意を知り、彼女を1年以上かけてインタビュー、書き起こして文芸春秋に持ち込み2002年6月、彼女の著作として「謝罪します」出版。

2002年3月12日 八尾証言を、「スーパーJチャンネル」で放送

八尾さんを取材中、テレビ朝日の上司は、その価値を認めず、業務としてはホームレスを取材することを命じた。しかし、八尾証言を放送し政府が動いたので大スクープとされる。

2002年3月29日 「八尾証言」の取材はテレビ朝日の社長賞を受賞。

しかし、北朝鮮パッシングのような報道が横行したので、このテーマから退く。

## 2003年以降のイラク取材の理由と経緯

高校生の時に、『世界』などに掲載されたベトナム戦争リポートを読んでいたが、その報道が戦争の残虐さを伝え戦争をやめさせることに貢献したことからジャーナリストを志望。イラク戦争が起きた時、ジャーナリストであれば、この戦争こそ伝えるべきテーマだと考え、取材希望を局の上司に申し出た。しかし、上司から「うちの局は、イラク現地の取材をしないと決めたから、したいなら局を辞めてくれ」と言われる。

2003年9月 テレビ朝日との契約を解除、10月 イラクに入国し取材活動を開始。

2003年11月24日 テレビ朝日の報道局「スーパーJチャンネル」に取材リポートを持ち込み、イラクのスニ三角地帯とファルージャの反占領運動の特集番組を放送。

2004年7月30日 テレビ朝日報道局「報道ステーション」で、大量破壊兵器疑惑を検証したイラクの核施設・ツワイサのリポート「イラク核施設の真実」を放送。

## イラク取材・レジスタンス運動

2003年10月 テレビ朝日との契約切れと同時にイラクに入り、ベトナム戦争をモデルにイラク戦争を考え「米軍は誰と戦うことになるのか」というテーマで取材。

ファルージャを中心にスンナ派のスニ三角地帯で、米軍襲撃事件が起きていたため襲撃事件の現場に行き取材を始めた。

### ムクタダ・サドル

2003年10月10日、シーア派のムクタダ・サドルが反占領運動を始め、「独自の政府を樹立した」と宣言したので、ナジャフ・サドルシティでムクタダ派の取材を開始。当時、英米のマスコミは、ムクタダ・サドルを、英国から帰国してシーア派を指導しようとしていたアブデルマジド・ホイ師をナジャフで暗殺した黒幕として報道していた。

ムクタダ取材してみると、夜間、100人を超える人々が、彼を訪ねて来て陳情をしている。ムクタダはそれを聞き、問題解決の相談に乗っていた。その様子が、日本の政治家たちがしていることと似ているので驚いた。

11月 ムクタダ・サドルのインタビューに成功したが、そのとき、私は、「日本の自衛隊がイラクに派遣されることをどう思うか？」と質問した。すると彼は「私は外国の政治に口を挟む権限がないので、政治的な意味でそれを良いとか悪いとかは言わない。しかし、もし日本が米国の顔色を窺って派兵するというなら、それは良い事ではないと思う。なぜなら、人は、自分の意思で物事を行うべきであり、誰の命令にも従うべきではないから。」と答えた。彼の言葉を聞き、私は、道理が通っていないのは日本政府で、ムクタダ・サドルの反占領運動は、理のある行為だと思った。

11月に一時帰国、複数のテレビ局で、ムクタダのドキュメントの企画を打診したが、日本のテレビ関係者でムクタダ・サドルのことが理解できる人は誰もいなかった。

そこで、テレビ朝日で、スニ三角地帯の取材だけを報道して12月に再度イラク入国。

ムクタダ派の背景を取材。ムクタダ第一秘書のムスタファ・ヤクブに、ムクタダとイランとの関係などをインタビューする。

ムクタダ派の正月を見る機会があった。ムクタダ派の信徒たちは、バグダッドの街角にテントをはり、300人ほどが、ご馳走をつくりテントの中で一緒に食べながら、世を徹して一人ずつ信仰告白を行った。彼らは歌うように自分の激しく強い信仰への帰依を語っていた。

2004年2月 一時帰国し、3月にイラク再入国。

4月2日 ムクタダ第一秘書、ムスタファ・ヤクブがホイ師殺害容疑で逮捕され、ムクタダ派が激しい抵抗を開始した。多国籍軍に空爆され血を流して倒れる住民を目撃するなど、米軍と多国籍軍が住民を無差別殺戮している現場を取材。赤ちゃんまで皆殺しになったと訴える住民たちを毎日インタビューした。

4月14日 ナジャフで、検問中のムクタダ派民兵・マフディ軍に一時拘束されることになる。しかし、ムクタダと面識があることを説明して、数時間後に解放された。

4月18日 サドルシティ取材中に車に轢かれて脳挫傷となり帰国した。

### ファルージャとアルカイダ

2003年10月 ファルージャでは、一週間に数回、米軍襲撃事件が起きていた。地元のジャーナリストは、アルカイダ系組織「アンサール・イスラム」が町に来たと言う。米軍は、住民の家を強制捜索、市民を無差別に逮捕、米兵による住民殺害事件も起きていた。

2004年1月、市民による反占領運動組織が生まれたと住民から聞く。

3月、反占領運動をする住民たちが、外国人に対する攻撃を計画していると警告される。

3月31日、米国警備会社・ブラックウォーターの社員が殺害され遺体が橋に吊るされ、その報復として、米軍はファルージャ掃討作戦を開始。

この戦闘中、私は同時に起きたムクタダ派の戦闘を取材したので、ファルージャは取材できなかった。そして、脳挫傷になって帰国後、イラクでは外国人が拉致される危険が増したため入国が困難となった。

2004年11月と2005年1月、イラクで取材中、通訳をしてもらっていたイラク人ジャーナリストに現地の取材を依頼、取材テープを送ってもらい、ファルージャのレポートをテレビ朝日報道局「報道ステーション」で放送。

2006年2月 現地に入らないと、ファルージャで本当は何が起きていたのか、またアルカイダ系の組織とは何か、わからないので、私は比較的安全と言われるイラクのクルド地区に入国。ここでアンサール・イスラムという原理主義組織が生まれた歴史があるので、根拠地だった町に行き、イラクのアルカイダのルーツを調査取材。また、クルド政府に逮捕拘束されているアルカイダ系組織の構成員たちのインタビューを行う。

ムハンマド・アンサール・シャハブと言うイラン系アラブ人は、イラクのアルカイダ幹部だと自称した。帰国して調べると、2002年に、この人物を米国のジャーナリスがインタビューし、開戦直後の2003年3月に、サダム・フセインとアルカイダが繋がっていた証拠として彼の証言を報道。しかし、2003年8月、シャハブを、英国のジャーナリストが再取材、彼の証言は嘘だという記事を書いている。シャハブの私への証言は、以前取材した二人への証言とまったく違う内容だった。そのことから、シャハブの証言の信憑性は極めて低い。シャハブへの取材で明らかになったのは、イラクとアルカイダが連携しているという開戦理由を、嘘の証言で補強したジャーナリストがいたということだった。

シャハブ以外には、アブドラ・アフマンというアンサール・イスラム構成員のクルド人にインタビューを行った。彼は、アンサール・イスラムが、アルカイダ系といわれる組織になるプロセスを詳細に証言したが、それは、根拠地の住民の証言と矛盾がなかった。

アフマンによれば、イラク戦争が勃発し、アンサール・イスラムはイランに逃げたが、2003年夏、彼らはイラクに再入国、反占領運動をしているイラク人組織と合体してアルカイダ系と言われる「アンサール・スンナ」が誕生したという。この組織の別の構成員、また、ザルカウイの組織、「統一と聖戦」の構成員のインタビューも行った。この二人は戦争後、失業したので、傭兵として組織に参加したという。7人の斬首をしたという証言も聞いたが、「アルカイダ」の実態はきわめて曖昧で、謎の組織と言う面ばかりが鮮明になった。

## 米兵のレジスタンス

2006年、「アルカイダ」と呼ばれるものの正体がわからないので、米軍の帰還兵たちが、その情報を持ってないかと思いクルド取材と平行して、米国取材を企画、イラク帰還兵たちと連絡をとり始めた。友人を通じて帰還兵と連絡がとれると「米軍はテロリストと、どのように戦ったか？また、テロリストたちに関する情報を上官からどう伝えられていたか？」とメールで訊いた。すると彼らは、「テロリスト」という言葉に抵抗を示し、「テロリストとは言わない。武装勢力と言う言葉は使うけれど」と返信してくる。反戦派のイラク帰還兵たちには「テロリスト」という言葉が政治的で危険な言葉であるという共通認識があるようだ。彼らは取材を受けることを拒否はしないが、誰がどういう経歴で、何を証言するのかがわからない。しかも米国は、非常に広く、複数の帰還兵にインタビューしようとする、広大な国土を移動するためや宿泊費用が膨大にかかってしまうので、取材はなかなか実現しなかった。

ボストンからワシントンDCまでのピースウオークが行われ、そこに帰還兵のジミー・マッシーが

参加するという情報を 2007 年の年末に聞いた。彼の名前をネットで検索すると、2004 年、海兵隊員で初めて、米兵のイラク人無差別殺戮を告発したという情報が出てくる。

2008 年 1 月 4 日、ジミー・マッシーをピースウオーク中取材しようと考えて渡米。

米国に行き、ジミー・マッシーはピースウオーク参加を止めたことがわかった。そこで彼にメールを送り、取材を申し込み、ワシントンDC到着後、そこからまた南へ約 600 キロのノースカロライナ州へ向かい、彼の自宅でインタビューした。ジミーの家の近くに住んでいた、帰還兵のジェイソン・ハードも取材をOKし、ジェイソン宅で、マイク・ロビンソンという帰還兵とも出会った。彼らの証言から、米軍の内部から見たイラク戦争が理解できるようになった。そして、取材過程で帰還兵たちがウインターソルジャーと名づけた公聴会を計画していることを知る。

2月に帰国し3月、再渡米。ウインターソルジャーの前日、アダム・コケシュにインタビュー。彼はファルージャ戦に参加したが「アルカイダとは、政府が国民に政策を支持させるための恐怖戦術に使われる亡霊だ。」と断言した。ファルージャの武装勢力の一人は、「自分たちはアルカイダではなく反占領運動をしている愛国者だ」と言った。米軍は、ファルージャ侵攻作戦を、アルカイダ系組織がファルージャにいるという理由で行った。これは、イラク戦争を始める理由が大量破壊兵器だったのと同じようなブッシュ政権の策略だと、帰還兵たちは考えていたのである。米軍は基本的には占領に反対するイラク住民と戦っており、その事実をごまかすためにテロリストの存在を捏造あるいは誇張しているということだ。それは、多くの帰還兵たちには自明で、ウインターソルジャーにおいて、「米兵が、イラク市民を虐殺、虐待している」と、帰還兵たちの口から、繰り返し証言された。

イラク戦争とは何か、未だその本当の姿は見ておらず、さまざまな政治宣伝を人々は信じ込まされている。ウインターソルジャーは、イラク戦争の事実解明が開始された記念すべき公聴会だった。私は、ジャーナリストとして、その検証報道を行いたい。

(この履歴は、田保寿一さんのご厚意でいただいた資料をそのまま印刷しています。)

3.22イラク戦争開戦6周年 映画&講演会 資料  
冬の兵士が語る「対テロ戦争」の真実

2009.3.22 発行

**LiveInPeace★9+25**

ライブ・イン・ピース 9 + 25 (略称:ライブインピース)

(旧アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局)

TEL 090-5094-9483 (事務局 大阪)

E-mail info@liveinpeace925.com

http://www.liveinpeace925.com/

100

[このリーフレットの資料、写真などは「冬の兵士 - 良心の告発」公式ホームページ  
<http://wintersoldier.web.fc2.com/wintersoldier.html> およびDVDより引用しています]